

令和7年度 令和の学び・新しい時代の教育委員会 研究のまとめ

委員長 久保 勝哉 (福島小)
副委員長 岩田 祥 (南木曽小)
委員 黒岩 航 (木祖中)
委員 末木 幸司郎 (南木曽中)

1 本年度の研究概要

(1)研究テーマ

「教育」というフレームをほぐし、新時代に求められる資質を培う学びへ

(2)テーマ設定の理由

VUCA の時代をよりよく生きること、自分らしく生きることが求められている現代。新時代に求められている資質を培うために、教育観や学校づくり、日々の授業づくりにおける一層の変革が求められている。これまで信濃教育が重視してきた子どもと共に創造する授業の文化を受け継ぎつつ、新しいスタイルの学びについて調査及び実践することを通して、その価値について考察を深めていきたい。

子どもファーストの学びや探究的な学び、単元内自由進度学習をはじめとする個別最適な学び、学び合い*1、『学び合い』*2などの協働的な学び、リフレクション型の学び、プロジェクト型学習(PBL)、横断的教育、遊びと学びの接続、学びほぐし、AIとCBTを組み合わせたICT活用学習、AR/VR/MR教材活用学習、遠隔教育、小規模校・少人数ならではの学び、学びへ誘う環境デザイン、子どもたちが行きたくなる学校デザインなど、新しい学びのスタイルや学校づくりが模索されている現代。それらの実践を前向きにとらえ、よさを発信していきたい。

また、教育方法論の枠組みにとどまらず、教師教育の視点や子ども観転換の視点、教師自身のメタ認知など、教師自身の価値観変革、マインドセットに関する研究についても同様に考察を深めていきたい。

教育というフレームを柔軟に「学びほぐす」(Un-Learn, 学習棄却)アプローチによって、固定概念からの脱却を生み、さらには、木曽の地ならではのよりよい教育を模索するきっかけとなることを願い、本テーマを設定した。

*1…佐藤学ら「学びの共同体」理論を提唱する学派の学習形式。個別追究を相互参照で進めていく

*2…西川純らが提唱する教育理論、学習形式。学習の全員達成を目指す協働的な学び。
呼称：『学び合い』

(3)研究日程と内容

第1回 5月19日(月)委員会①「研究テーマ、年間計画作成」オンラインにて

第2回 6月27日(金)委員会②「単元内自由進度学習公開授業(兼:信州大学教職大学院研修)」福島小学校にて

- 個人視察① 学校法人 佐木学園 揖斐幼稚園 (岐阜県 岩田祥・南木曾小)
個人視察② 学校法人 きのくに子どもの村学園 (和歌山県 久保勝哉・福島小)
個人視察③ 私立桜丘中高等学校 (東京都 末木幸司郎・南木曾中)
第3回 1月16日(金)委員会③「今年度の研究のまとめ検討会」オンラインにて

2 研究内容

(1) 研究の視点

①子どもたちが心からわくわくしているか

「学びの主体性」(自律性, 自己調整力)の大きな動機づけは, 内発的な動機づけに支えられた子どもたちの変化欲求である。子どもたちが教師の言うことに従い, 静かに椅子に座って学んでいることだけが「よい」とは, 限らない。授業を観る上で, 授業における統制システムや評価システムとしての合理性の追求ではなく, 真なる子どもたちの前向きな言動, 心理に触れられるようにしたい。

②子どもたちの社会的文脈やユニークさを尊重できる研究へ

子どもたちへの当事者意識に寄り添い, 子どもたち自身のストーリーやユニークさを語り合えるようにしたい。テストなどの数値変化や短期的な成果, データのみで子ども観を語らないようにしたい。

③学校全体にながれる心地よさや公平さ, well-being を追究する

学校にいる一人の人間としての子ども自身の豊かさ, 教師自身の豊かさを追究する。また, 競争, 比較, 煽りなど, 不安感や劣等感を増長させる可能性のある教育的要素についても併せて考察していく。

(2) 研究調査上の留意点

それぞれの教育方針や教育方法のよさを考察していく上で, 評価テストをはじめとした短期間における数値的評価などの成果を出すことが本研究の目的ではない。子どもたちのありのままの様子を, 当事者意識をもって我々がとらえ続けるまなざしをもつことが特に重要である。子どもたちが, 真の学びの自律者になっているか, 本当にわくわくしているか, 安心して学びに取り組んでいるかという視点で子どもたちの学びの具体に追っていきたい。また, 教師自身の前向きな気持ち, 後ろ向きな気持ちなど, 全てを総合的に振り返りながら研究を進めていけるようにしたい。

(3) 視察及び実践報告

木曾町立福島小学校 久保勝哉教諭 視察レポートより

①視察先 学校法人きのくに子どもの村学園（和歌山県）

②視察日 令和7年11月27日（木）

③目的

ユニークな学校づくりで有名な「きのくに子どもの村学園」を訪ね、学校づくりのコンセプトを理解したり、子どもたちの姿を実際に観たりすることで、個を尊重する学びや子ども観に寄り添う学びについての研究をさらに深めるため。



驚きと感動が学びの動機づけとなる

④視察内容

ア 学園の基本方針

「どの子にも、感情、知性、人間関係のいずれの面でも自由な子どもに育てほしい」という願い。デューイの教育思想、ニールのサマーヒル・スクールの思想、フリースクールのコンセプト、長野県伊那小学校の体験学習などのコンセプトが学校づくりのベースとなっている。オルタナティブ教育を1980年代から構想、実現させた私立学校。学園長は、堀真一郎（元大阪市立大学生生活科学部教授）。

(ア)自己決定の原則 子どもがいろいろなことを決める

学習計画や行事の立案が子どもと大人の話し合いで決まる。子ども自身が自ら入るクラスを選べる。クラスミーティング、寮のミーティング、そして全校集会など話し合いのとても多い学校である。

(イ)個性化の原則 一人ひとりの違いや興味を大事にする

個性や個人差を尊重する。年齢が同じという理由で、同じことを同じ方法で同じペースで、同じ答えに向かって学習することは、しない。広い範囲のさまざまな学習や活動が選べる。

(ウ)体験学習の原則 直接体験や実際生活が学習の中心に

本やドリルの勉強よりも、実際に作ったり調べたりする活動が重視され、「プロジェクト」と呼ばれて週時間の半分を占めている。クラスはプロジェクトのテーマによってつくられ、子どもは好きなテーマを選んでチームに所属する。

イ フレキシブルなカリキュラム・マネジメント

きのくにの活動の目玉でもあるプロジェクト。「人が生きる」ことを、「衣」「食」「住」「表現」の4つの視点から追求していく。時間割を2時間単位とし、活動の連続性、持続性を支える。

小学校の時間割

	月	火	水	木	金
8:55-9:05		ユースフルワーク	ユースフルワーク	ユースフルワーク	ユースフルワーク
1,2 時間目		基礎学習	プロジェクト	プロジェクト	自由選択 5・6年外国語
3,4 時間目	プロジェクト	自由選択	プロジェクト	プロジェクト	基礎学習 全校 meeting
5,6 時間目	基礎学習	自由選択	プロジェクト	基礎学習	プロジェクト

(ア)遠くから通学する子もいるので、月曜日は11時から開始する。

(イ)プロジェクト(週14時間)、基礎学習(7時間)、クラスの枠を超えて行う自由選択(週6時間)、全校ミーティングで構成されている。

(ウ)毎朝、8時55分から9時05分の間はユースフルワークの時間。

ウ 生活の中核となる「プロジェクト」の具体

(ア)劇団きのくに(表現)

日本と世界のおはなしをテーマに劇づくりを楽しむ。まず、世界中のおもしろい話やこわい話、ワクワクする話を探すところから始める。5月にはスコットランドのキルクハニティに滞在する。「イギリスの話を劇にしてみたい」「魔女が出てくる劇!」「ネッシーが出てくる劇!」など、子どもたちからアイデアがたくさん湧いてくる。

(イ)工務店(木工, 園芸)

“自分たちの生活空間を楽しく豊かに”をテーマに、工務店の庭を魅力的な空間にしていく。「昨年完成した喫茶店にテラスをつくりたい」、「おもちゃ博物館にたくさんの作品をかざりたい」、「池を修理して噴水を復活させたい」など、思いは様々。子どもたち同士で力を合わせて汗を流す活動を充実させる。



本格的な建築物を作る子どもたち

(ウ)おもしろ料理店(食の研究)

今年度は「麺」をメインに活動。天ぷらうどん、味噌ラーメン、ザル蕎麦などを創作。「粉から麺をつくってみたい」「すごく長い麺をつくりたい」「オリジナルつゆをつくりたい」「日本各地のご当地麺や世界の麺についても知りたい」。やりたいことが膨らむ子どもたち。

(エ)ファーム(農業)

「自分たちで作物を育て、料理して食べることを楽しむ!」をテーマに活動。「今年ファームでしたいこと」についてミーティングした結果、全部で160個以上の意見が出た。それ以外にも木工や染物や裁縫や釣りなど、体験してみたい内容で溢れている。

(オ)じっけん工房(実験)

「思いっきりものづくりを楽しもう！」がコンセプト。子どもたちの創造力をかきたてるおもちゃづくり、やきものづくりなどに取り組む。「つくる」だけでなく、そのもとになる木や土などの素材にも注目していく。木が材木になるまでに、どんな人たちが関わっているのか、粘土はいったいどうやったらできるのかなど。

エ. 子どもたちの活動の具体

(ア)ワクワク感とアイデア溢れる A 児

木曜日、3、4時間目の「プロジェクト」の時間。子どもたちの議論は、白熱していた。スコットランドのキルクハニティ（姉妹校）に旅行し、学んできた怖い昔話「グリーンレディ」の劇のシナリオについて活発な意見が交わされていた。



セリフ決めで多くの意見が飛び交う

A 児：「4ページの『私も子どもがほしいわ』（すでに役になりきったセリフの言い方）という部分で、夫の意見も入れてほしいなって思う」

B 児：「『ダグラスさん、子どもがほしいのですね』（役になりきったセリフの言い方）って、つなげるように、『では、』って言ってほしい」

C 児：「『レイモンドが消えちゃった』『それから 500 年』（役になりきったセリフの言い方）までの間がなんか不自然だなって思う。だから、ナレーションを入れた方がいいんじゃないかな」

A 児：「ネッシーを（ストーリーに）入れたら、なんか勝手にズカズカ入ってくる感じがして、合わない感じがする」

子どもたちの話し合いの熱量に驚かされた。矢継ぎ早に様々な子たちが意見を交わしていく。その間は、数秒しかない。セリフ読みにも気持ちがこもっていて、「私がこの役をやる前提だったら、こう語る」というくらい没入感のあるセリフの言い回しである。子どもたちには、「リアルさ」「切実さ」「没入感」「臨場感」があり、劇を生み出す当事者としての、また、表現者としての生き生きとした姿が、この練り上げの段階から観られた。

(イ)慎重にセリフを決めていく D 児

D 児：「（D 児が議長を務めていたので）議長発言いいですか。グリーンレディに『バイバイ』は、いらないと思う。（子どもではなく、大人だから）もうちょっと上品に『また会いましょう』の方がいいと思う」

E 児：「私もそう思った」

T：「でももうちょっと偉い人。『さようなら』くらいのセリフに変えるのか、『ダグラスさんって偉ぶることなくて』ってことを入れて、『バイバイ』にした方がいいか話し合った方がいいと思う」

B 児：「ちょっと、メモを取っていいですか？」

（省略・10分間の話し合いの後）

F 児：「(周りに) 聞いたら？」

D 児：「じゃあ、顔を上げてください。聞いてもいいですか。『さようなら』に変えるのがいい人？」(結果・7人) 「『バイバイ』のままにして、友だちみたいに仲良くするのが分かるほうがいい人？」(結果・7人)
(さらに長い話し合いが続けられる)

「バイバイ」なのか、「さようなら」なのかというほんの一言を決めるために、十数分という長い時間が使われ、深い議論が交わされた。D 児は、議長としての発言の可否を必ず確かめてから、慎重に話し始めるようにして、フェアな話し合いが学校の文化基盤になっていることが伝わってくる。ファシリテーターである先生の助言を受けてから、子どもたちは、メモを取ったり、台本を読み返したりして、ストーリーがイギリスの物語の生活文脈として違和感がないかを確認していく。多数決を取っても決定しない話し合いは、この後も引き続き行われた。

子どもたちの「一言」にかける思いの高さが印象的であった。それは、作品への愛着やこだわりの表出であり、また、よりよい作品や高次の作品を生み出したいという一人の表現者としての願いそのものであった。

オ 考察とまとめ

この学校には、感性豊かでのびのびとした表現者が多い。また、学びの面白さを実感し、没入感を伴った学びをしている児童も多い。そこには、生活文脈の中にある学びや必要感のある学び、内発的動機付けに支えられたワクワクとした学び、当事者意識のある学びが展開されていた。学習者自身が「学ばされる」のではなく、「学びたくなる」生活そのものが展開され、活動の主体が真に子どもたちであった。その子どもたちの生き生きとした学びの姿が、後付け的に「粘り強い学習への取り組み」という現象として観える状態であった。つまり、「粘り強さ」という要素は、どうやら大きな目的として位置づけられている様子はなく、もっと根幹部分である子どもたちから湧き上がる自発性そのものにあるようだった。



6年児童のカラフルな色彩のスケッチ

その背景には、子ども自身が学習内容の多くを自己決定し、自発的に活動を進めていることが挙げられる。大人側は、正に伴走者であり、強い舵取りを行わない。一つの例を挙げると、昼食(バイキング形式)の時間になり、地上5メートルの高所に取り付けてある造作ブランコで遊び続けている児童がいたのだが、大人はあたたかく見守り続けたのだ。主目的は、子ども自身の自発性であり、少し怖いブランコ乗りにチャレンジすることを大切に見とどけ、活動に没頭し続ける子どもを尊重する姿が印象的だった。

「真の意味の自律した学び」という教育を考える上で、この学校の取り組みや子どもたちの生き生きとした姿は、大きな指標となるであろう。子どもたちは、本来、人間としての心の豊かさや表現力、新しいものを生み出す創造性、粘り強い学びの持続性など

をもち合わせている。そして、学びたいという意欲に溢れている。もし、それらの本来の豊かさが「学校」という社会の中で、影に隠れてしまうことがあるのであれば、従来の教育の構造そのものを見直さなくてはならない。

子どもたちの純粋で躍動感溢れる表現力を抑え込んでしまう教育構造上の要素とは、何か。これまで教師が「上手くいっていた」と感じていた一回一回の授業の裏側で、子どもたちの内面の底なるエネルギーや表現力が削ぎ落とされてきた可能性はないか。もしかしたら、我々が「素晴らしい子どもたちの表現」として観てきたものの多くは、子ども本来の生き生きとした躍動感溢れるエネルギーが削ぎ落とされた結果の「ちっぽけな表現」に過ぎなかった可能性がある。

「教師の側から知識を授けるよりも、まず知識をもとめる動機を子どもたちがもつような学校が真の学校である」（デューイ）という言葉には、学校そのものがもつ「独特な社会」に対する、時代を超えた普遍的な問いかけを感じる。従来の「よい」と考えられてきた学校目標、目的、教え方、環境、教材などをはじめとしたあらゆる教育的構造に対し、恒久的に振り返り、疑い続ける意識をもつことが新時代に求められている。真の意味で「生き生きとした子どもたち」「自律した学び」を育む学校を創造し続けたい。

1 視察先 学校法人 佐木学園 揖斐幼稚園（岐阜県）

2 視察日 8月21日（木）

3 目的

「なんだろう」「しらべてみよう」「ためしてみよう」と、子ども自身が気づき、取り組む「はっけん」や、さらに工夫して試す「ぼうけん」など、子ども自身の好奇心や問いかけ、その子その子の思いに耳を傾け、見つめ、その子自身の力を育てたいと考えている揖斐幼稚園（2025年度ワークショップの様子）を視察し、子どもの姿や環境づくり、教師の支援などから学ぶ。

4 視察内容

(1) 揖斐幼稚園の考え方

① 揖斐幼稚園創立の精神「はっけんとぼうけん」の生活

子どもが自ら関心を持ったことに、主体的に取り組み、試行錯誤し、達成したよろこびを味わう生活を実現することを創立の精神としている。

その実現を目指すことで、個々の子どもがのびのびと自分の世界を創造することが可能な、自由で、ひとりひとりの在り方を認める園風を築いてきた。

この創立の精神と園風は、創立者である佐木謙介と佐木みどりによってつくられたものである。

（揖斐幼稚園「令和7年度幼稚園要覧」より）



写真1：（揖斐幼稚園HPより引用）

② 揖斐幼稚園の教育・保育

1) 願う姿

自分の力で生きる人に

人は人生で様々な困難や苦しみと出会う。それに負けずに乗り越えようとすることで人生を切り拓くことができる。そのような人になる基盤をつくりたい。

「学ぶ」喜びを知る人に

自ら「学ぶ」ことの充実感を知ることによって優る喜びはない。それを知ることは人生を豊かにする。幼児期に遊びや活動を通して体験する機会を体系的につくる。これは想像遊びとアート活動を核として通して育てたい。

2) 教育目標 表現する子 考える子 思いやりのある子

3) 保育目標 自分の体を自分で守る子 人と協働することを喜ぶ子 生活を人と共につくることを楽しむ子

4) 教育観・保育観から（一部）

- ・「私は私」という個と、「みんなの中の私」という集団へのまなざしを持って人とかわる力を育てる。
- ・一斉の保育場面もあるが、その時は子どもの発想、方法、ペース、プロセスを大切に

選択の余地を残す。

5) 教育・保育を構想する (一部)

- ・保育は、幼児と保育者の相互作用によって創り上げていくものである。
- ・幼児の生活は遊びであり、園生活は遊び中心に営むものである。
- ・一人ひとりに添うことを大切にしながら、園生活の積み重ねによって獲得されるものや、集団の中で育つものを明らかにする。

6) 幼稚園での学び

幼稚園は学びの場所である。幼稚園での学びは、知識を単に増やすだけでなく、「学びの源流」に出会うことであると考え。 「学びの源流」は、大人が文化を生成する現場に子どもが立ち会うことから生まれると考え、アートの専門家、研究者との協働を実践しする。

7) 世界的視野で幼児教育・保育の試みに挑戦する

形式的学校評価にとどまらず、教育・保育の質的進化を続けるために、「学びの場・育ちの場」の一現場として、乳幼児期の子どもの育ちに対する社会認識の深まりや、幼児教育・保育における実践知を高めるための試みを行い、学会活動などで、成果を社会に発信しつづけることが必要であると考え。

(揖斐幼稚園「令和7年度幼稚園要覧」より)

(2) 揖斐幼稚園のカリキュラムとワークショップについて

① 「はっけんとぼうけん」の理念とカリキュラムテーマ

創設以来重視し続けてきた「はっけんとぼうけん」の理念は、子どもが自ら、園の環境や教師の構成した環境にかかわり、試行錯誤しながら、何だろう、不思議だな、どうしてだろう、試してみよう、やってみようとするものの出来る生活を実現し保障することである。この探究の視点は、幼稚園教育要領から小学校学習指導要領につながっていく、「主体的・対話的で深い学び」である。また、「何を学ぶかではなく」「どのように学ぶか」の基盤となる幼児期に育てたいことがらを保育内容として具体的に掲示してきた。そのために(カリキュラムの柱「自然」, 「アート」, 「ことば」を基として)年間のカリキュラムテーマを設定している。テーマは子どもの生活から拾い上げ、教師も子どもも共にテーマを種にしながらか遊びや活動を展開し、日々の生活を興味深く豊かにしていくことで、学びを深めている。この方法は幼児期の発達や育ちを捉えた方法である。また、教師・保育者は、「見る」・「見られる」ことを熟考することで、在り方を問い、専門性が深まる契機となると考える。

(揖斐幼稚園「2025年根本祐杜WORKSHOP公開シンポジウムご案内」より)

② ワークショップとは

ワークショップは、日々の生活から切り離された単発のイベントではない。ワークショップでの体験を日常の生活に取り込み、保育・教育の年間カリキュラムの柱の一つ(「アート」)として楽しむ。(「アート」は幼児期の子どもの育ち(成長・発達)に有効な方法であると実感し、研究を続けている)

年間を通して、カリキュラムテーマに基づいた「物語づくり」をしていく。子どもたちは、テーマに関することを調べたり見つけたりすることで知識を増やし、それらの知識をベースにして、友達や先生とイメージを共有しながら物語をつくっていく。このことは、子どもたちの知的な発達のきっかけとなる。教師は、物語づくりのヒントになるような絵本や図鑑などの「材料」や「環境」づくりをしていく。大切に考えているのは、先生が一方向的に押し付けるのではなく、子どもたちの発想から物語づくりのヒントとなる遊びや活動を導き出し、子どもの考えを刺激しながら生活の中で共につくり出していくこと。

このようにして創られていく物語の一場面としてのワークショップを年3回行い、アーティストと共に作品をつくる。ワークショップは、アーティストの世界、そして子どもたちの探究の世界、その両者が出会い、子どもたちが自分の世界を広げる機会となる行事。どのクラスにもファンタジーの世界が登場する。現実とファンタジーの世界を行き来できるのは幼児期の特徴である。子どもが自分から興味・関心を持って取り組むこのような活動が子どもの考える力や創り出す力（基礎学習力）になっていく。教師は、どの子も十分楽しめるように環境を整え、子どもの考えや願いを受け止めて子どもの世界づくりを援助・指導している。

ワークショップの対象児は年長児だが、年長だけでなく、それぞれの年齢に合わせてテーマに取り組み楽しんでいる。日常生活の中で、図鑑で調べたりすることで「不思議だな、おもしろいな」などという自然や科学に対する関心を持たせたい。また、テーマに関する絵本やおはなしをし、ファンタジーの世界も知らせ、豊かなイメージを持って遊ぶ楽しさを味わわせたい。どの年齢の子どもも、その年齢なりの「学び」になるようにと願っている。

(揖斐幼稚園「ワークショップについてのお知らせ」「2025年根本祐社 WORKSHOP 公開シンポジウムご案内」より)

③保育者・教師はどうしたらよいか

子どもが絵を描くとき、物をつくっているとき、見ているだけでよいのだろうか。子どもの作品に手を加えてはいけないのだろうか。子どもの世界（絵や作品、表現されたもの・ここと）を豊かにするために、私たち保育者や教師はどうしたらよいのだろうか。

1) 子どもが主体、保育者・教師も主体である



写真2：2019 ワークショップ3回の様子
(揖斐幼稚園 HP より引用)

「子ども主体」・「自由保育」という言葉の意味をどう理解するのか。自由保育の意味を誤解する保育者がいるようなので「環境による教育・保育」が使われるようになったのだろう、と思われる。幼児教育・保育の現場では、「子どもが主体」、「子ども自ら」という言葉の理解が十分ではない。子どもが好き勝手に行うことが自由であり、子どもだけが主体であると考える傾向がいまだに見られる。その結果、子どもを目の前にして手を後ろに組み見回るだけの「見回り保育」が見られるのだ。どうすれば、今子どもたちがしている遊びや活動が楽しくなるのだろうか、とか、子どもがよりよく育つために何を留意し、どのように言葉かけをし、共に楽しむためには、などと遊びや活動の展開を考えていない事例が見られるようだ。

「環境による教育・保育」の本当の意味は、教師や保育者の願いやねらいを環境構成にあらわすこと。

2) ワークショップ時の保育者・教師の役目

大事なのは、子どもの思いを捉える、受け取る、感じ取ること。そして、何を留意したらいいのだろうかと考えたり、思いつくには、「子どもを見る」ことだ。しかし、子どもも私たちが「見ている」。つまり、先生はどうしたいのかを知ろうとする時がある。つまり、期待に応えようとする。やりとりすること、聞くことを大切に。そのうえで、



写真3：2019 ワークショップ3回の様子
(榎妻幼稚園 HP より引用)

○材料用具は足りているか、あるのか。必要と思われる材料などを思いついたら、すぐに用意してみる。

○何をしたらいいのか、どうしたらいいのかわからない子どもには、やってやる、教える。教えること、やって見せることを恐れずに。

○時には先生が子どもとやりとりしながら決めてやってもいい時がある。「これでいい？」と確認することを忘れずに。

○子どものやっていることで、おもしろい、ほかの子どもたちにも見せてやりたいと思った時には、見せたり紹介したりする。もちろん先生やアーティストのでもよい。

○選択肢がある（子どもが選ぶことができる）。

(佐木みどり「R7 ワークショップ事前園内研修資料」より)

(3)今年度のワークショップ（2025年根本祐杜ワークショップ）の様子から

①カリキュラムテーマ 「つち・ちきゅう・からだ」

②アーティスト 根本祐杜氏（東京藝術大学彫刻専攻博士号取得、セラミックを主な素材として彫刻作品を制作、CAF 賞最優秀賞、日本大学芸術学部長賞等受賞）

③根本祐杜ワークショップを楽しんできた子どもたち

第1回（6/5）：根本さんと初めて出会い、根本さんがいつもはどんな作品をつくっているのかお話を聞いたり、石膏と水を混ぜて固まる様子を見たりした。

第2回（7/23）：砂場に穴を掘り、石膏を流しこみ、作品作りを楽しんだ。つき組は、龍が卵を産みにきてくれるよう「龍の卵」を一人一つ作った。ほし組は、水の妖精の力を借りるため「水の妖精の宝石水たまり」を作った。

（揖斐幼稚園「ワークショップについてのお知らせ」より）

④子どもたちと先生たちがつくってきた物語（テーマ「つち・ちきゅう・からだ」から）

つき組：日本の鍾乳洞や洞窟を調べていく中で、北海道にある鍾乳洞に龍の伝説があることを知り、鍾乳洞にいる龍のことや洞窟にすむ生き物について調べることを楽しむ。龍の卵が見たいと願い、手紙を書く。届いた返事には「たすけて」と書いてあり、龍に何が起きているのかと心配する。助けたい、会いたいと願い、一人一つの卵をつくる。しかし、卵が盗まれてしまう。卵が戻ってくるように、龍の腹をつくりたい願う。→第3回ワークショップ

ほし組：世界の家を調べていく中で、土でできている家があることを知り、土の家があるインドのことを調べることを楽しむ。また、インド洋にいるジンベエザメなどの魚を調べることも楽しむ。ジンベエザメに来てほしいと願い、手紙を書く。水の妖精が部屋に遊びに来る。水の妖精の力を借りたら、ジンベエザメも来てくれるかもしれないと考える。水の妖精の力がこめられるジンベエザメをつくりたいと願う。→第3回ワークショップ

（揖斐幼稚園「ワークショップについてのお知らせ」「令和7年度ワークショップ『つち・ちきゅう・からだ』」より）

⑤第3回ワークショップの実際から（3日間にわたる第3回ワークショップの2日目の様子から）

1) 活動から抜けない、繰り返す子どもたち

地面を掘ってつくった大きな龍の腹とジンベエザメの形の中に、石膏を垂らしたり飛ばしたりして模様が残るように石膏を全面に広げていくことやサイザル（石膏を割れづらくするための植物繊維）を敷き詰めていくことをひたすら繰り返した子どもたち。休憩をはさみながらであったが約2時間もの間、誰一人活動を抜けることがなかった。なぜ、このような表れが起きていたのか。次のような要因があるのではないかと考察した。

- ・個の選択や教師の出によって材へのアプローチを変化させる（刷毛の使い方、場の選択、周囲への働きかけ、試行錯誤、刷毛から手へ、物語から生まれた歌を歌う等）。
- ・石膏を飛ばす・サイザルを敷くといった行為自体や、身体で石膏を感じ、受け入れ、まみれ、分かっていることを楽しむ。
- ・毎回ものができる、それが更新されていくおもしろさ、偶発的な発見があること。
- ・見立て、経験とつなげて想像することを楽しむ。
- ・協働する人の存在（根本さん、先生たち、友）。
- ・何ができていくのかという期待感、何か大事なものをつくっているという認識、大切にしたい思い。
- ・背景に物語があり、自分も登場人物として参画している、自分なりの文脈がある。
- ・一つのものをつくっていくということが園での日常の中にあり、積み重ねてきている。

2) 根本さん、先生たちの居方

根本さん：子どもたちの様子，教室でブロックをしきつめてつくられていたジンベエザメを見て「面白い」と，急遽プランを変更する。子どもを受けて再構成する。自分のいいと思ったものに引きずり込みたいと思うものだが，根本さん自身もやったことのない「ぼうけん」へ。自分も分からないことに挑戦することが自分の育ちにもつながると考えておられたのかもしれない。子どもを見ていないが，子どもを感じている。この作品をどうしていくかを本気で考え，制作していく。その姿を子どもが見て大きく影響を受けていく。子どもに考えを伝える。NOも伝え意味づけていく。子どもにおもねない。材に対して子どもと対等。共に作品をつくる主体性をもつ存在。このような主体性が今教師から失われてはいないか。子どもに任せることと教師が教えることの二者択一になってはいないか。そのようにカテゴライズしてしまうことに問題があるのではないか。

先生たち：何がどのようにできていくのか，先生たちも分かっていない。完成形がないことで，先生たちも子どもたちと共につくることを楽しんでいる。分からないことのよさ。

物語とつなぐ，文脈をつくるための子どもへの働きかけを繰り返している。子どもが活動に文脈をもち，意味を見いだす支援を積極的にしている。

5 終わりに

「見ているだけでよいのだろうか」という佐木みどり先生からの投げかけに，思わず昨年の自分の公開授業を問い直しているわたしがいた。その授業で次々と語る子どもの考えを聞き続けたわたしは，材に対して子どもと対等であったのか。あの時，自分を語ろうとする子どもの声をわたしの出によって埋没させたくないと思いながら，自分を本気で語る子どもたちの声をその真意や価値を汲み取って位置づけることに全力を注いだ。わたしは子どもたちと問いを明らかにしたいと思っていたのだろうか。

今年，わたしは学級の子どものたちと沢に通い，より楽しい沢づくりをしている。子どもたちの活動の様子を見たい，見なければと思う反面，石を運んだり草木を刈ったりと，わたしの願いをもってわたしがしたくて活動していることがよくある。そういった時，子どもたちのことを見ることはほとんどできない。しかし，そのような教師の居方に意味があるのかもしれない。

引用文献

- ・ 揖斐幼稚園 2025. 令和7年度幼稚園要覧
- ・ 揖斐幼稚園 2025. 2025年根本祐社WORKSHOP公開シンポジウムご案内
- ・ 揖斐幼稚園 2025. ワークショップについてのお知らせ
- ・ 佐木みどり 2025. R7ワークショップ事前園内研修資料
- ・ 揖斐幼稚園 2025. ワークショップについてのお知らせ
- ・ 揖斐幼稚園 2025. 令和7年度ワークショップ『つち・ちきゅう・からだ』
- ・ 揖斐幼稚園 2025. 学校法人佐木学園揖斐幼稚園ホームページ(<https://ibi-youchien.ed.jp/sitemap/>)

- 1 視察先 私立桜丘中高等学校（東京都）
- 2 視察日 12月2日（火）
- 3 目的

東京都に位置する桜丘中学・高等学校は、近年の教育界において「学校改革の成功モデル」として広く耳目を集める存在である。その改革の中核を担う人物こそ、保健体育科教諭でありながら学校運営の中枢に参画する中野優教諭である。同氏は、ICTを駆使した戦略的な広報活動や、グローバルな視座を持つ探究学習（総合学習）の構築を主導し、同校の教育的価値を飛躍的に高めてきた。

本視察の目的は、同校が掲げる「未来は自分たちの手で創る」というスローガンの下、いかにして「自ら考え行動できる」生徒を育成しているのか、その教育実践の本質を理解することにある。具体的には、全国に先駆けて定着させた「1人1台端末」の日常的な活用実態、進路実現と直結した「探究学習」のカリキュラム設計、そして生徒の主体性を最大限に引き出すための学校環境整備について、現地での観察を通じて知見を深めることを主眼とする。

4 視察内容

(1)教育のグランドデザイン：社会の変化を生み出す「自律」

桜丘の教育の根底には、創立者・稲俣移喜の「女性の自立」という精神を受け継いだ、強い「自律」の願いがある。

・変化への能動的姿勢

単に社会の変化に追いつくのではなく、学校そのものが社会の変化を生み出す場であることを目指している。これは、知識を得るだけでなく「試行し協働する」ことを重要視する姿勢に現れている。

・絶対評価の視点

他人と比べるのではなく、「今日から明日への成長」を重視する絶対評価の視点を持ち、一人ひとりの資質を育むことを教職員が共通認識としている。

・校訓の実践

勤労（骨惜しみなく働く）と創造（考えよ、エ夫せよ、進歩的に）という校訓が、現代の探究学習の土台となっている。

(2)ICT教育の深化：ジグソーパズル型から「レゴブロック型」へ

全国に先駆けて一人一台のタブレット（iPad）を導入した同校では、活用のフェーズが「使いこなす」から「価値を創る」段階へ移行している。

・個別最適化の実現

決まった枠にピースをはめる「ジグソーパズル型」ではなく、パーツの組み合わせで何通りもの完成形を生む「レゴブロック型」の学びを推進している。

・生活のツールとしての活用



タブレットを通学時間などの隙間時間での「学習時間」への転換や部活動の成果可視化による動機付けに活用し、生徒が自らの生活をマネジメントする武器としている。

・AIと対面教育のバランス

AI 英語教材による個別最適化を進める一方で、対面でしか得られない人間関係や感情を察する力の育成も同時に重視している。

(3)探究学習とキャリア形成：「伝える」から「伝わる」へ

桜丘の探究学習は、単なる調べ学習にとどまらず、自分の人生（キャリアプラン）を自ら創り上げるプロセスそのものである。

・プレゼンスキルのトレーニング

自分の考えを一方向的に「伝える」のではなく、相手の感情を動かし賛同を得る「伝わる」スキルの習得を重視している。タブレットで自分の発表を撮影・客観視するなどのトレーニングが行われている。

・傾聴力の重視

発信力とセットで、他者視点を持って話を聴く「傾聴力」をリスナー側のスキルとして伸ばしている。

・キャリア探究と対話

20名以上の社会人が登壇するキャリア講演会や企業インターンシップを通じ、実体験に基づく経験値を積み上げている。

(4)授業や学校生活の様子

①保健体育科の視察（第1校時：高校1年女子・TT形式）

第1校時は、高校1年生女子の保健体育を視察した。2クラス合同のチームティーチング形式で行われており、一方のグループは「サッカー（技術テスト・試合）」、もう一方は「持久走（長距離走）のガイダンス」と、25分ごとにローテーションする授業形態をとっていた。同校のグラウンドは人工芝が整備されているものの、広さはバレーボールコート2面分程度である。限られたスペースで全員が一斉に活動すると、接触による怪我のリスクや、運動量が確保できない（待機時間が長くなる）といった課題が生じる。こうした環境制約を逆手に取り、活動内容を分けることで効率的な学習環境を構築していた。

サッカーの活動では、生徒たちがiPadを活用し、「ロイロノート」や動画ファイルを参照しながら技術テストや作戦会議を行っていた。自身の動きを撮影してモデル動画と比較するなど、ICT機器が「文房具」として自然に機能している姿が印象的であった。一方、持久走のガイダンスを行っていたグループでは、単なる走力向上ではなく、「問い」を立てる探究的なアプローチがとられて



いた。中野教諭は、生徒が抱きがちな「長距離は辛い」というマイナスイメージを払拭し、いかに前向きに取り組ませるかを重視している。「音楽を聴くとタイムは縮まるか?」「シューズの重量と速度の関係は?」など、生徒自身が仮説を立て、仲間と対話しながら検証方法を模索していた。特筆すべきは、両活動において生成 AI が日常的に活用されていた点である。「サッカー、女子、コントロール上達法」「長距離、タイム、食事の影響」などのプロンプトを用いて情報を収集し、最適解を導き出そうとする姿が見られた。

②情報科の視察（第3・4校時：高校2年・英語特進コース）

第3・4校時は、2年生（英語特進コース）の「情報」の授業を視察した。当該クラスは春休みに海外留学を控えており、現地での「探求学習プロジェクト発表」に向けた準備が行われていた。本時は、プレゼンテーションの質を高めることを目的として、AIによる音声解析ソフトを活用していた。生徒が話す英語の時間配分や声量が可視化され、数値として客観的に評価される仕組みである。さらに、生徒が撮影した発表動画をオンラインで留学先の現地教員に送信し、採点を受ける取り組みも行われていた。



中野教諭によれば、「クラス内での相互評価だけでは、どうしても『日本人同士の阿吽の呼吸』や既成概念が働き、評価規準が曖昧になる」という。AIによる客観的数値と、ネイティブ教員による外部評価を組み合わせることで、生徒は「現地の人に伝わりやすい表現」や「自然な言い回し」について、よりシビアに自己分析を行っていた。授業中、生徒たちは ICT を駆使しながら「この表現は適切か」「より伝わる言い方はないか」と活発に対話していた。中野教諭は、生徒が提出した分析シートと動画を確認し、教員としての視点からフィードバックを行って返却するなど、AIと人による多層的な指導が展開されていた。

③授業における ICT 活用の日常化と「思考の再構築」

校内視察を通じて、全教室の机の上に iPad が常備されている光景が見られた。紙の教科書やノートを併用する生徒も散見されたが、多くの生徒が必要なタイミングで自動的に iPad を用い、情報を検索・収集していた。ICT の活用が特別なイベントではなく、文房具の一つとして完全に定着していることが窺える。特筆すべき活用事例として、意見共有の場面が挙げられる。「この事象についてどう考えるか」という教員の問いに対し、生徒全員が即座に iPad へ入力し、回答を一齐表示する。これにより、自身の意見と他者の意見を瞬時に比較・検討することが可能となっている。さらに、その視覚化された情報を基に周囲との対話（協働学習）を行い、当初の自分の考えを練り直す「思考の再構築」の時間が丁寧に確保されていた。単なる効率化にとどまらず、思考を深めるツールとして ICT が機能していた。

④空間的制約が生み出す規律と生徒の規範意識

同校の校舎構造は複雑かつ、廊下幅が生徒3人分程度と極めて狭い設計となっている。しかし、移動教室の際には全生徒が迅速かつ整然と行動しており、混乱は見られなかった。特筆すべきは、物理的な狭さがかえって生徒の配慮ある行動を醸成している点である。すれ違う際に接触しないよう自然と列を作り、譲り合いや挨拶を行う姿が日常的に見られた。進学校特有の落ち着きに加え、環境に適応するための社会性やマナーが自然発生的に身につけている印象を受けた。

⑤情報端末の通用区分と安全管理体制

生徒の雰囲気は総じて社交的で穏やかであるが、情報機器の取り扱いに関しては厳格なルールが存在した。それは「始業時間内のスマートフォン・携帯電話の使用禁止」という規定である。同校では、学習用端末としてのiPad活用は推奨する一方、外部回線と容易に接続可能な個人の通信機器については、明確に制限を設けている。中野教諭によれば、これは「外部トラブルの遮断」および「学習環境の聖域化」を目的としているという。無防備な外部接続は、時として生徒自身や教員を予期せぬトラブルに巻き込むリスクがあるため、学校内においてはiPadのみを安全な学習ツールとして定義し、生徒・教員双方を守るための共通理解として徹底されていた。

(5)学習環境の構造化：SSノートと自学自習のシステム

自由を支えるのは、生徒自身が持つ「規律」と「習慣」である。

・SSノートによるPDCA

生徒はスケジュール帳「SSノート」を活用し、計画(P)・実行(D)・評価(C)・改善(A)のサイクルを習慣化している。学習時間を数値化・可視化することで、自信と改善の根拠を得ている。

・多様な学習スペース

私語厳禁の「自習室」と、互いに教え合う「教え合い学習室」の二種類が用意されており、生徒がその時のニーズに合わせて自ら環境を選択できる。

・URC(University Resource Center)

放課後の学習指導を行うセンターには、同校の卒業生(現役大学生)がチューターとして常駐し、学習のみならず部活との両立についてもアドバイスをを行っている。

5. 考察とまとめ

桜丘中高等学校の教育実践には、管理による統制から「自律による創造」へのパラダイムシフトが明確に見て取れる。社会の変化を待つのではなく、自らが「変化を生み出す」主体となることを目指す同校の姿勢は、これからの教育の在り方を象徴している。

まず、生徒一人ひとりが「SSノート」を活用し、自らのスケジュールを管理して計画(P)・実行(D)・評価(C)・改善(A)のサイクルを習慣化させている点は、自律の基盤となっています。この「習慣化」こそが周囲と差をつける鍵であり、目標達成に不可欠な自己規律を育てている。また、武器としての「タブレット(iPad)」活用においても、単なる「使いこなし」から、自ら価値を「作る・発信する」段階へと昇華させている。これは、決め

られた枠にピースをはめる「ジグソーパズル型」の学びではなく、組み方次第で無限の完成形を生む「レゴブロック型」の思考へと学びの構造を転換させていると言えるだろう。

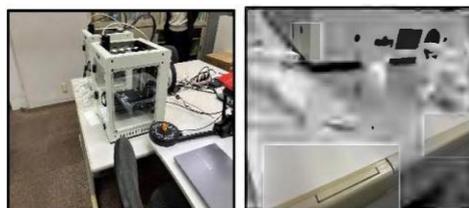
このような環境下で、生徒たちは「正解のない問い」に対して自ら考えを創り出す力を養っている。「答えがないなら作ればいい」という探究の姿勢は、日常の疑問に対して自ら関わり、行動する原動力となっている。ICT や探究という現代的なツールは、生徒の内発的な動機付けを支えるだけでなく、受験すらも「英語を制すれば勝ち確」といったポジティブなイベントとして楽しむ、躍動感あふれるエネルギーへと昇華させている。

教師の在り方もまた、従来の「指導者」から、生徒の意思決定を徹底的にサポートする「伴走者」へと変化している。多くの教職員やチューターが生徒一人ひとりと向き合い、対話を重ねることで、生徒は「私、こんなことできたの!?!」という自己発見の驚きを経験している。他人と比べるのではなく「今日から明日への成長」を重視する「絶対評価の視点」を大切にする桜丘の実践は、これからの学校づくりにおける大きな指針となるだろう。

6. 終わりに

・桜丘教育の本質と生成 AI 時代の新たな学び

今回の視察を通じて、桜丘中学高等学校の教育環境は、さながら「最新のデジタルツールを備えたレゴの工房」であるとの印象を強く抱いた。学校側は、生徒の自律を促す「SS ノート」という強固な土台と、ICT、探究、英語といった色とりどりのパーツを提供する。しかし、それを用いて何を創り上げるか、その設計図は生徒自身の手委ねられている。教員は「熟練の職人（マイスター）」として生徒の隣に立ち、彼らが自身の想像さえ及ばなかった「新しい価値」を創造するプロセスを、共に楽しみながら支えている姿がそこにはあった。



3Dプリンターと試作したもの

また、中野教諭が語る生成 AI 時代の教育観も示唆に富むものであった。「AI の発達により、文章やスライド作成など『0 から 1』を生み出す作業は誰もが容易に行えるようになった。今後重要になるのは、AI が生み出した『1』をいかに活用し、発信していくかという展開力である」との指摘は重い。その展開は、着実な改善(1.1, 1.2)にとどまることもあれば、飛躍的な革新(10, 20)へと繋がる可能性も秘めている。一方で、使い方を誤ればマイナスの結果を招くリスクもある。0 を 1 にするハードルが下がった今だからこそ、その先にある「価値の増幅」と「適切なコントロール」を教えることこそが、次世代の教育者の役割であると痛感した。

・編集後記（視察を終えて）

ふと、生徒玄関の警備室に目をやると、長野県 PR キャラクター「アルクマ」のぬいぐるみが飾られていた。東京の最先端に行く改革校の片隅に、信州ゆかりの品を見つけたことは予期せぬ喜びであった。本校の改革の根底に、あるいは信州教育の理念が何らかの影響を与えているのかもしれない。そんな親近感と、長野県の教育現場への還元への意欲を新たにし、帰路についた。



1 はじめに

本校は、学校教育目標「生命を大切にし自ら伸びようとする生徒」の育成を目指し、「自学自伸」、「先見考動」を重点活動に据えている。

今年度は、学校教育目標の実現に向けたキーワード「自ら考え自ら動く生徒」を教科研究においても重要視し、校内研究に努めてきた。

2 テーマ設定

昨年度末に本校職員を対象に行った生徒の実態を聴いたアンケートを基に、令和7年度の木祖中学校の生徒の主として伸ばしたい面・力を、以下のように決め出した。

- ①自分・他者・教材との対話から「問い」や「願い」をもち、主体的に学習に向かう姿勢
- ②よりよい表現の方法や多角的なものの見方を模索し、見方や考え方を広げよう、理解を深めようとする

そして、学校教育目標とも関わらせながら、全校研究のテーマを「『自ら考えようとする生徒の育成』～問いや願いから展開する授業の創造を通して～」と設定した。

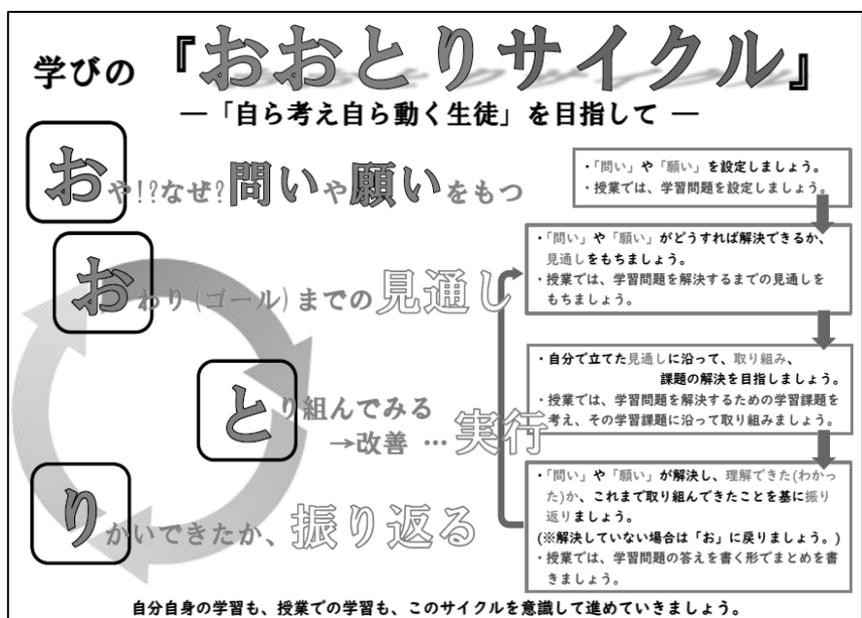
3 研究テーマの実現に迫るための手立て

本年度、本校ではテーマの実現に迫るための手立てとして、授業で AAR サイクルを取り入れた学習サイクルで回すことを授業構想の基本とした。AAR サイクルとは、OECD の Education2030 プロジェクトで提唱されている Anticipation（見通し）-Action（行動）-Reflection（振り返り）のステージを繰り返す学習プロセスだ。この発想を基に、本校では独自の学習プロセス「学びの『おおとりサイクル』」を定めた。（下図参照）

生徒が主体的に学習に取り組むことを目指し、問いや願いから授業がスタートすること、また AAR サイクルのそれぞれのステージでの自分たちの学びを生徒自身がメタ認知することを目指し、本校に馴染みのある「おおとり」の語を借りて名称を考案。

本手立ては、真新し

いものでも、革新的なものでもなく、先生方がこれまで行ってきてくださった授業構想・展開を体系化したものあり、AAR サイクルの視点で日常や授業を振り返ると、意外に行っていることにも気づかされる。どの教科でも、どの場面（導入・展開・終末）でも、気軽に取り入れられるのが AAR サイクルのよさでもある。



4 職員の声と職員研修

今年度は生徒の学習オリエンテーションで学習の合言葉、『おとりサイクル』を紹介し、我々職員も、生徒たちも共通認識で授業をスタートした。

1学期、試行錯誤を繰り返しながら授業改善に取り組んでいくと、先生方から「問いを子どもの言葉で立てていくのが難しい」、「どうしても教師主体になってしまう」、「取り組みたくなる『問い』が立てられる人、そうでない人がいる」という悩みが出てきた。

そこで夏季休業中に職員研修を計画。研修のテーマは、「みんなで『問い』をつくらう」。イソップ寓話の『三匹の牛とライオン』を用いて、『問い』をつくってみる研修を実施。

①『問い』をひたすらつくってみる。互いに相談したり『問い』に関する評価を行ったりせず、自由な発想でとにかくたくさんつくってみることを目指した。

②つくった『問い』を2つのグループに分類する活動。

1つ目は、「開いた『問い』」グループ。もう1つは、「閉じた『問い』」グループ。分類を終えたら、それぞれのグループに分類された『問い』をもう一方の『問い』に書き直す。

③つくった『問い』に優先順位をつける。「一番印象に残った『問い』」、「読み深めることができそうな『問い』」、「ハッとさせられた『問い』」など、それぞれのグループで活動のまとめを行いつつ、選んだ『問い』を全体で共有。

本研修のねらいは、『問い』をつくってみること。さらにどんな『問い』なら生徒たちが「読みたい」、「知りたい」と思うかを体感すること。また、「開いた『問い』」と「閉じた『問い』」、それぞれのメリット・デメリットを知り、使い分けながら授業を展開していくことを目指すことであった。

	開いた質問	閉じた質問
長所	<ul style="list-style-type: none"> ● 議論を呼ぶ ● 好奇心をそそられる ● 相手の人となりがわかる ● 自由な表現ができる 	<ul style="list-style-type: none"> ● 議論しなくてもいい ● 答えがすぐに出せる ● その人が求めている前提がわかる
短所	<ul style="list-style-type: none"> ● 答えがすぐに出ない ● 結論に時間がかかる 	<ul style="list-style-type: none"> ● 興味がわからない ● 答えが誘導される ● 考えなくなる

図：開いた『問い』と閉じた『問い』の長所と短所

5 本校での実践 国語科 1年「私のモチベ爆上がり文房具！！」

ア 授業の流れの概要・単元展開の意図

「情報を整理して説明しよう」という単元で、身近なものを題材として、情報を集めたり分類したり、関係づけたりして相手にわかりやすく伝えることを目指して単元展開を行った。

本単元では、取り上げる題材を誰もが持っている文房具とし、さらに自分のお気に入りのものにするすることで、相手に「知ってもらいたい」、「手に取ってもらいたい」と願ってもらえると考え、題材を設定した。また、情報収集を行う際に、自ら『問い』を立

てて、文房具を見つめることで、その特徴をさまざまな観点から収集することができるであろうと考えた。

イ 導入場面での生徒の様子

本単元の導入では、私自身が愛用している文房具を提示し、その魅力について語った。見慣れないものに興味を示す生徒。また、実際に手に取り、使ってみる生徒。自分だったら何を紹介しようかと筆箱の中身を机に広げてみる生徒の姿が見られた。

生徒が取り上げる文房具もシャープペンシルやボールペンに留まらず、付箋や筆箱、クリップと多様なものが選ばれた。

また、分かりやすく伝えることを単元のゴールとすることを伝え、「誰に紹介したい？」と問うと、多くの生徒がその相手を想像する中で、A生が「文房具屋さん」とつぶやいた。教師が想像した相手とは異なる発言だったものの、B生、C生と次々に「それ、いいね」と同調する生徒が出たので、A生の発言を受け、文房具屋さんにご各自がおすすめする文房具の魅力を分かりやすく伝えることを目的として据えた。

ウ 情報収集場面での生徒の様子

文房具屋さんにご自分のおすすめする文房具の魅力を伝えるために、魅力を収集する時間では、機能や構造、使いやすさ、値段等の観点を決めて情報収集を行うと良いだろうと見通しをもった生徒たちが、次のような『問い』を立てて、情報収集を行った。

- ・「どうして、この形になったのか」
- ・「なんでこの商品が生まれたのか」
- ・「この機能は、どんな場面で役立つのか」
- ・「他のものと比べてみてどうか」等

『問い』を自分で立てながら情報収集を行ったことで、その商品だけの魅力を焦点化し、情報収集に意欲的に取り組む生徒の姿が見られた。

B生は、本時の流れを話している際に、「先生、もうやっていいんですか？」と選んだ商品について早く調べたい、たくさん魅力を見つけたいと意欲を表出する場面もあった。

エ 生徒の記したおすすめする文章の実際

以下は、D生の記したおすすめ文房具を紹介する文章の実際である。

消しゴムは、小さくなってくると捨ててしまう人も多いと思います。そこで商品化した「ピヨゴム」について紹介します。

「ピヨゴム」は、「最後まで愛着を持って使いたくなる消しゴム」をコンセプトに商品化されました。

おすすめポイント1つ目は、構造です。ピヨゴムは、はじめは四角い消しゴムですが、角を使って消すと、どんどん角がけずれてまるくなります。そして、可愛いヒヨコになります。この消しゴムなら、小さくなくても捨てない人が多いと思います。

おすすめポイント2つ目は、値段です。ピヨゴムの他にも、ブタゴム、ネコゴム、シバゴムなどがあります。ピヨゴムとブタゴムは、2個入りで300円ほど。ネコゴムとシバゴムは、ピヨゴムを2個つなげた長さの消しゴムが1個入りで300円ほどです。

このように、ピヨゴムにはおすすめするところが沢山あります。ぜひ、売ってください。

オ 授業後の考察

題材の設定，単元を通して付けたい力の精選，それに合わせた言語活動を明確にし，授業に臨むことで，生徒の「やってみたい」を支援することができたと感じる。大きな枠は提示するが，伝えたい相手や情報収集の観点を生徒に委ね，生徒の言葉で単元の中に位置付けたことは，教師が描いた道筋からは逸れたものの授業の主導権を生徒に委ねることにもつながり，その結果，相手の立場を踏まえて見通しをもって活動に取り組む姿や「わかりやすく伝えよう」，「そのために具体的に題材（文房具）の良さをたくさん見つけよう」と主体的に学習に励む姿が見られたのではないかと思う。

4 研究の成果と今後究明すべき課題

(1)明らかになったこと

①子どもたちの生き生きとした学びを生む多様な要素

子どもたちの生き生きとした学びの背景には、大きな基盤として、柔軟な学校教育方針や教育課程の編成、学校が持つ文化そのものが関係している。報告書に共通した要素として、ア. 自己選択ができる学び、イ. 生活文脈に沿った学び、ウ. 遊びを学びとする考え方、エ. 問いや願いを位置づける学び、オ. 相手意識のある学び、カ. アート性ある学び、キ. 伴走者としての教師の存在、ク. 新しい価値を生み出す ICT 活用、ケ. 評価観の転換などが特徴として挙げられる。

ア 自己選択, 自己決定ができる学び

自ら決定する喜びを子どもたちが感じている。自己調整力と自己責任性が問われ、失敗する経験、達成感を味わう経験も大きな学びの一部である。自ら選び、自ら決めることが日常的な子どもたちの学びのサイクルとなっている。

イ 生活文脈に沿った学び

子どもの生活に根差したテーマが設定され、子どもらしい発想力を発揮できる場やストーリー性ある表現ができる場があり、子どもたちの主人公性を高めている。自分事として子どもたちが材と関わり合い、それが躍動感のある表現力に繋がっている。

ウ. 遊びを学びとする考え方, 立ち位置

遊びと学びの二項対立ではなく、「遊びと学び、社会的実践は、全て並列的な価値を持っており、全てが繋がっている」というアプローチがある。魅力ある材と支援者の働きかけにより、子どもたちのわくわく感や「思わず学びやりたくなる」という内発的動機付けに繋がっている。

エ 問いや願いを位置づける学び

子どもの願いや子どもの言葉で問いを立てていく学習展開を取り入れている。子どもたちから生まれた問いによって、当初予定していた学習展開の計画を変えた。それにより、学びの主体が子どもたちに移り、学習がより深まっていった。

オ 相手意識のある学び

伝える相手が具体的に焦点化されていることで、学びの目的性が高まる。お店に自分のおススメ商品の魅力を伝える学習という学習展開にしたことで、子どもたちの問いが切実で現実的なものになり、学びが深まっていった。

カ アート性ある学び

アート性ある環境、豊かな素材がある。支援者からの問いかけや協働により表現力を高めていく。子どもたちと同じものを見つめ、子どもたちの思いを感じ取り、共にのめり込み、共に表現する大人たちがいる。

キ 伴走者としての教師

教授者としての教師の存在から、ファシリテーターとしての存在へ転換が図られており、子どもたちと教師が権威的な縦の関係性から、共同体としての横の関係性が築かれている。

ク 新しい価値を生み出す ICT 活用

学習を支援する情報機器の活用から、新しい価値を生み出すためのツールへの役割転換を図り、教育における DX 化を目指している。生成 AI の活用を図り、問いの解決に繋げたり、AI 分析による技能のフィードバックに繋げている。

ケ 評価観の転換

形式的な学校評価や数値的総括評価、比較的评价からの脱却を図っている。また、個人内評価を重視したり、子どもたちの技能や表現力を評価する教師の立場から、共に楽しみ、共によりよい生活を営む一人の人間としての立場への転換を目指したりしている。

(2) 今後の課題

- ①視察の質と量の両軸を大事にしていきたい。子どもたちの多様性、公平・公正、包摂性を支える学習環境を生み出し、また、少子化が進む木曾ならではの学びや木曾のよさを生かした学びを追究していくためにも、視察データの母数をより多く集積し、密度の濃い情報を抽出、発信していきたい。さらには、特色ある学校の取り組みに焦点を当て、木曾全体の意識改革を促していきたい。
- ②明日からの実践に活かせる有益な情報を還元していくことが最も重要である。そのためにも、この研究自体が理想論ではなく、身近な実践のヒントになるよう、ありのままを伝え続けたい。ポジティブな実践報告だけでなく、学校づくりや授業づくりとしての悩み、先生方の精神的な葛藤、子どもたちの何気ない言動、表情の奥に隠された感情など、学校そのものが抱えるネガティブな要素にも目をそらさずに伝えていきたい。
- ③多様な都道府県の実践を集めていくためにも、予算配分の柔軟化を反省点として挙げたい。東京都や和歌山県の視察では、交通費のみで既に予算が足りず、実費部分も多かった。場合に応じて、一人当たりの予算上限（2万円）を変更できるような柔軟な予算の枠組みを検討していただき、遠距離の都道府県の視察に対応できるようにしていきたい。